「べんがらちゃん」の「古民家」「新築」活動

株式会社 鎌倉設計工房
kamakobo
藤本　幸充

「べんがらちゃん」

１５年前　鎌倉設計工房が手掛けた物件がＴＶ放送された際に、
藤本が「べんがら」を塗っている姿が映されて話題となり、 以来仲間内で付けられた 「通称」です

素木の格調高い書院造の建物が一般的だった豊臣秀吉の時代、 千利休はあえて煤を混ぜた
「べんがら」を木部に塗り、 黒くしました。（色付九間書院、 茶室「待庵」）
なにも塗らない自然の木の建物も美しいですが、 年月を経たような味わい、 わびさびの古色を「美」としたわけです。

私たちは千利休の茶室や桂離宮でも使われていたこの「べんがら」を
現代デザインの住宅に生かす活動を行っています。

「べんがらとは」

酸化第二鉄の赤い粉末（顔料）です。
昔は赤いべんがらに煤を加えて黒に
近い古色を出しましたが現代では赤
のべんがらを高温で焼成して赤茶か
ら黒に至る純度の高いべんがらが作
られています。
それに水や柿渋と混ぜて木材に塗り、
塗ったあとは菜種油で拭き上げます。
　べんがらは陶芸の釉薬、 有田焼の
赤絵、 また漆芸の輪島塗などに使わ
れます。
　使用例は古代までさかのぼりラス
コーの洞窟壁画や高松塚古墳、 縄文
時代、 土器の赤色に使われています。

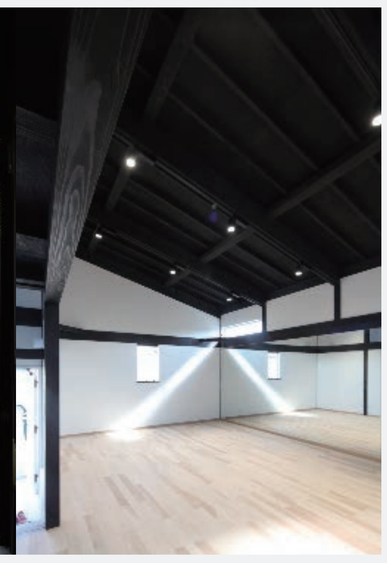
軒・壁　赤茶べんがら

天井・壁　赤茶べんがら

黒紫べんがら

室内壁　黒紫べんがら

柱・天井　黒紫べんがら



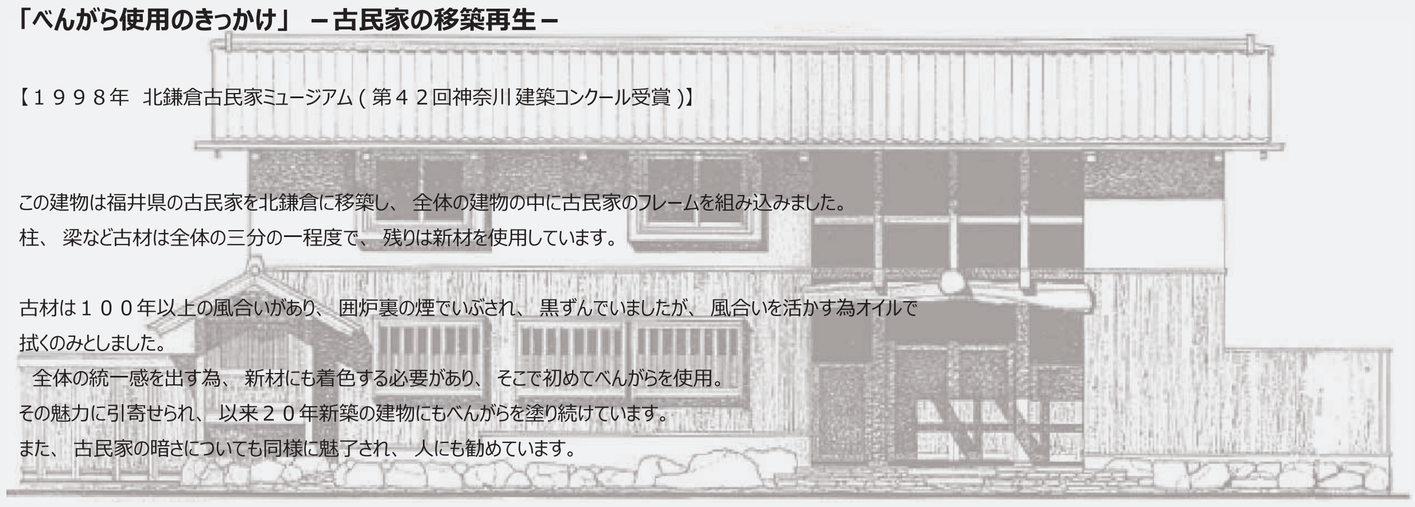
古材：オイル　新材：べんがら

「べんがら使用のきっかけ」 －古民家の移築再生－

【１９９８年　北鎌倉古民家ミュージアム (第４２回神奈川建築コンクール受賞)】

この建物は福井県の古民家を北鎌倉に移築し、 全体の建物の中に古民家のフレームを組み込みました。
柱、 梁など古材は全体の三分の一程度で、 残りは新材を使用しています。

古材は１００年以上の風合いがあり、 囲炉裏の煙でいぶされ、 黒ずんでいましたが、 風合いを活かす為オイルで
拭くのみとしました。
　全体の統一感を出す為、 新材にも着色する必要があり、 そこで初めてべんがらを使用。
その魅力に引寄せられ、 以来２０年新築の建物にもべんがらを塗り続けています。
また、 古民家の暗さについても同様に魅了され、 人にも勧めています。



円覚寺隣　北鎌倉古民家ミュージアム　線路側外観

「古民家の魅力」

古民家は室内に明暗が漂う。
暗さは人の心を育む。 落ち着かせる。 休息させる。 部屋の広がりを感じさせる。
古民家のように大黒柱や梁、 小屋組みなどを現した建物に
べんがらを塗ると古民家の明暗が生まれます。
そこに光のリフレクターとなる白壁を介在させ、 モダンなテイストを創ります。

「べんがらの魅力」

・**渋い**仕上がり
・変化する―光の当たり具合で赤茶が赤に、 黒が紫になり、 変化する**幽玄味**がある
・木目が**いぶし銀**に浮かび上がる
・合板やＣＬＴが**銘木**に見える。
・**わびさび**の落ち着いた雰囲気を作る
・**陰影**を漂わせる自然の素材
・樹種による色味の違いや、 節の有無などが、 統一され
　インテリアが**上品**なイメージになる

・**素人**でも塗りやすい
　住まいの外部に使う羽目板や、 合板に塗装するのですが、
　何枚も塗ると達成感が湧いてきます。
　自分で行えば塗装工事費も浮き、 建築主一家で楽しみながら塗れる
　いわば心を豊かにする「遊び」になります。

→掲載写真の半分以上が建築主の自主施工
　外壁板を２００枚塗ったクライアント
　天井や壁材を塗っているうちにすでに張られていた床板まで塗ってしまった
　ツワモノもいます

天井・柱・格子　すべて黒紫べんがら